

2020 年 3 月 31 日

公益財団法人 日本国際協力財団
理事長 秋山 進 殿

特定非営利活動法人渥美半島まちづくり推進機構
代表理事 渡 曾 一 昭

2019 年度国際協力 NPO 助成
成長型事業完了報告書

貴財団の 2019 年度国際協力 NPO 助成成長型による助成を受けた「外国人技能実習生を対象としたインドネシア共和国における研修農場の運営と田原市でのサポート事業」の実施状況について、下記のとおり 2019 年度事業が完了しましたので下記のとおり報告いたします。

記

1. プロジェクト名

「外国人技能実習生を対象としたインドネシア共和国における研修農場の運営と田原市でのサポート事業」

2. プロジェクト期間

2019 年 4 月 1 日～ 2022 年 3 月 31 日（3 ケ年）

3. 進捗状況報告期間

2019/4/1～2020/3/31（2019 年度）

4. 実施地域

海外：インドネシア共和国バトゥ市周辺

国内：愛知県田原市

5. 援助対象者及び対象者数

海外：インドネシア共和国バトゥ市周辺

対象者：バトゥ市職員、外国人技能実習候補者及び OB、地元高校生、地元農家

1 年目実績（2019 年度） 165 名

国内：愛知県田原市

対象者：田原市内に在住する外国人技能実習生、受入事業所

1 年目実績（2019 年度） 113 名

6. 上位目標

研修農場が現地団体により自立して持続的に運営されること、事業が継続して実施される。また、田原市とバトゥ市が継続的な交流活動を目的とした合意に至ることで活動が引き継がれる。

7. 事業進捗状況

この事業を推進するにあたっては、申請書のとおり「計画に至った経緯」・「目的」を踏まえ事業を推進する必要がある、具体的な運営に当たっては、双方とも自治体との協力が不可欠であることを認識し、既に、双方とも自治体・関係団体との協力・支援の協働体制は整っている。

こうしたことを踏まえ、2019年度事業と同時に継続性のある3か年計画を双方で計画し、双方とも2019年度事業がスタートした。

I、海外：インドネシア共和国ふるさと財団

- ① インドネシア共和国においては、外国人技能実習生を対象としたインドネシア共和国における研修農場の運営を実施するにあたって、農地の確保が最重要課題であり、事前調査を踏まえ、田原市の農業に見合った農地を、インドネシア共和国バトゥ市の丘陵地3000m²を借用することで、田原市ウイズとも協議し決定。2019年4月より本格的に農場の整備に入った。
- ② また、グリーンハウスの建設は、断食の期間が5月から6月であることから、スタートの時期は少し遅れたが、本格的に農場の整備・ハウスの建設は6月となった。その後、農場スタッフの努力もあり7月にハウスは完成した。
- ③ ハウスの完成を機に、かねてより計画をしていた、教育農園の開所式を2019年7月17日、バトゥ市関係者、農業学校関係者、農業学校の生徒、バトゥ市周辺の方と現地農家、関係スタッフ約73名で実施した。
- ④ 特にこの時期は乾季の時期であり水の確保が懸念されたが、貯水槽の整備により水源の確保が整った。
- ⑤ 昨年からのテスト栽培を踏まえ、メロン、トマトの植え付けをし、注意を図りながら散水に努めた。
また、ハウスに8月から9月にかけてイチゴの苗（カリフォルニア産）の植え付けをした。
- ⑥ 農場運営に当たって人員の不足が生じ、この事業をより効果的に運営するため、農場人員を増やし、8月に一部開拓をしていない部分の土地（農地）の整備・整地に努め、トイレ、休憩所を新たに設置した。
- ⑦ この事業の運営は、近隣の農家の皆さんに理解をしていただく事が必要と感じ、農家の皆さんに農業に関する情報を得ると同時に、ふるさとの農場を見ていただくよう呼び掛け、理解を深めた。
- ⑧ この事業は自治体の協力が不可欠であることから、バトゥ市役所、農業高校の協力を求めるため、再三足を運び支援・協力を求めた。
その結果、バトゥ市農業高校の生徒教育実習の場として利用することになり、教育実習は16回実施した。
- ⑨ 7月初めトマト苗の植え付けをしたが、移植の時期を誤り失敗した。
また、グリーンハウスで植え付け・栽培したメロンは、温度の配慮・水分調整の誤り等で

成功とは言えずメロンも失敗した。今後は露地メロンも視野にメロン栽培を検討したい。

- ⑩ 植え付け計画、農地の改良、散水の量・時期他、青山氏の指導の下改善していきたい。
- ⑪ 今後は、青山氏の指導を仰ぎ、地域の気候に適したカリキュラムを作成し農場運営に当てる。
- ⑫ 植え付け作物は、温室栽培では、イチゴ、トマトチェリー、メロン、露地栽培ではブロッコリー、ニンジン、ジャガイモ。
- ⑬ 台風の影響により温室2棟が倒壊寸前になり竹の骨組みから鉄骨に改修。
- ⑭ 植え付け作物は思ったように栽培できず、大変苦慮した。
- ⑮ バトウ市農業高校の教育実習の場として16回の教育実習を実施。
- ⑯ 次年度の事業計画を作成に当たりSWOT分析（スウォット分析）を実施。

※詳細は「別添：フルサト報告書」

II、国内：田原市 外国人技能実習生を対象としたサポート事業

- ① 8月25日（日）技能実習生サポート事業「日常生活サポート交流会」を開催。

愛知県立福江高等学校の協力得て、福江高校中庭にて七輪によるバーベキューを楽しみながら、福江高校生徒10名とコミュニケーションを図り、日常生活に必要な知識を学んだ。併せて、田原警察による「交通ルール」、田原市役所防災対策課による「防災教室」を学び、最後に、参加実習生全員に日本語による「アンケート」調査を実施し、終了した。第1弾の事業としてはまずまずの成果であった。

- ② 栽培事例視察研修事業「田原市内視察研修バスツアー」を企画・準備。

開催日を10月27日に決定し準備に入る。この事業の趣旨を十分理解した上、行政・関係団体へ協力を求めた。また、福江高校にも協力を求め生徒のレクチャー役をお願いし確約をいただいた。バスツアー形式での視察研修であることから、大型バス1台をチャーター。視察先は、田原市内で酪農（搾乳）業を営んでいる「デイリーパラダイス」とし、周知用の案内をJA愛知みなみ農協の協力を得て受け入れ農家へ募集の案内を配布。募集と同時に定員オーバーとなり、この事業は地域に浸透してきたことが伺える。研修先が酪農農場（搾乳）、実習生のほとんどが初めての経験であり興味津々牛舎の中を見入っていた。また、伊藤社主の話もあり充実した視察となった。

- ③ 映像資料作成事業は、愛知県立渥美農業高校へ依頼。

事前に渥美農業高校へ訪問し、鈴木校長から高校として協力と支援の確認を得、その後、担当してくださる農場長眞壁先生を紹介していただき、眞壁先生との打ち合わせが始まった。再三打合せをしている中で、中丸先生の紹介を受け、結果、中丸先生と生徒で実習偏と栽培編を制作することになった。

そこで、実習偏の試写会は2月に予定をしているが、中丸先生としては既に多くの映像資料を収集しており、後は編集作業とナレーションの挿入作業で完成することのこと。

その後、実習偏は完成し、2月23日に試写会を実施した。

④ 農業起業セミナー及びビデオ試写会

映像資料（実習偏）の完成に伴い、2月23日（日）農業起業セミナー及びビデオ試写会を開催した。実習生25名、受入農家3名。講師は青山房生氏（㈱マーコ会長）。

㈱マーコの現在に至るまでの事業展開を、通訳（インドネシア語）を交え講話、技能実習生は熱心に聞き入っていた。思ったより時間がかかったが充実した内容と感じた。また、映像資料（実習偏）のビデオ試写会を、渥美農業高校中丸教諭により説明を受け、改めて技能実習生としての心構え、田原市の良さを学んだ。併せて、渥美農業高校のPRビデオも鑑賞した。インドネシアバトゥ市の農業高校と田原市渥美農業高校と交流が持てる機会があれば、この事業の目的に一步近づいた感じがした。

⑤ 技能実習生サポート交流会

農業起業セミナー・ビデオ試写会が終了後、伊良湖ホテル&リゾートにて、渥美農業高校生徒3名、受入農家と共に昼食会を開催。その後、技能実習生にアンケートしていただき昼食会は終了した。昼食会終了後、菜の花まつりの開催会場（菜の花ガーデン）に赴き、2時間ほど遊んでいた。技能実習生にとっては有意義でもあり楽しい1日を満喫していただいた。

8. 報告時まで発生した課題と取り組み

- ① 7月に予定をしていた、インドネシアバトゥ市への農業指導は、篤農家（青山房生）の体調不良により計画通りに実施できず、今後は、篤農家の都合も考慮し現地指導の日程を決める必要がある。また、現地指導をする場合、篤農家から見て問題点等を指導するのも必要であろうが、インドネシアバトゥ市農業従事者が何を聞きたいか、何が問題かを事前に調整し取り組んでいくことが重要である。

その後、11月に篤農家（青山氏）が現地訪問し農業指導に携わった。また、3月に予定していた現地指導は、新型コロナウイルスにより断念せざるを得なかった。

- ② バトゥ市とWithとのスカイプを利用したネット電話の情報共有、及び農業指導は思うように対応できず、ウイズ側との日程調整が必要。

その後、スカイプで対応したが、フルサトの日本語通訳が十分とは言えず、ウイズ側に意味が十分伝わって来ない。併せて、何が聞きたいか、何が問題かが、フルサト側で把握していないと思われた。また、本来ならウイズ側で発信するのではなく、報告の意味も含めフルサト側より発信すべきではないかと思う。

現在は、ラインでの交信が頻繁で、グループ全員が閲覧することが出来、篤農家青山氏もラインを利用して農業指導を行っている。

9. 添付書類

- ・助成金支出報告書（別紙3 成長型助成金支出報告）
- ・事業の進行状況を証明する写真など

10. 事業担当者および問合せ先

別紙1 (第1～第2四半期報告用)

6. 事業進捗状況

上位目標（申請書に記載した上位目標）	
研修農場が現地団体により自立して持続的に運営されること、事業が継続して実施される。 また、田原市とバトゥ市が継続的な交流活動を目的とした合意に至ることで活動が引き継がれる。	
事業目標（当年度に目指すゴール）	達成度
インドネシア（バトゥ市）で、農業技能実習生経験者や地元で温帯農作物の栽培を希望する農家を対象とする研修プログラムを確立する。同希望者に対して農業技術研修を実施する。田原市においては、市民による技能実習生へのサポートを通じて地域住民と彼らとの相互理解を深める。また、市役所や学校を巻き込んだバックアップ体制を構築する。	インドネシア（バトゥ市）において農場（温室）等の整備は、概ね8割方進んでいるが、地元農家を巻き込んだ研修プログラムはあまり進んでいない。今後の課題である。 田原市においては、市役所や福江高校・渥美農業高校を巻き込み、技能実習生へのサポート事業は計画通り順調に進んでいる。

ふるさと財団

Yayasan Furusato

活動計画 (申請書に記載した具体的活動)	実施状況	活動実施成果と確認方法
グリーンハウスの建設と播種	この事業を運営するにあたり、農地の確保が最重要課題であり、事前調査を踏まえ、田原市の農業に見合った農地を、インドネシア共和国バトゥ市の丘陵地とすることで、田原市ウイズも確認し決定した。 断食の期間を避け、スタートの時期は少し遅れたが、本格的に農場の整備・ハウスの建設は	グリーンハウスの建設は、当初予定は5月であったが、断食の期間があり完成は7月にずれ込んだ。 ウイズとしての確認作業は、フルサトインドネシアとから送られてきた「週刊活動レポート」にて確認。

	6月となった。グリーンハウスの建設場所は三か所とし、そこを重点的に農地の整備をした。ただし、オーガニック栽培を基本に農場の整備を図った。 骨組みは主に竹で、基礎は鉄筋とした。農場スタッフの努力もあり7月にグリーンハウスは完成した。各グリーンハウスの面積は、$11\text{m} \times 9.5\text{m} = 104\text{ m}^2 = 3$棟。 また、これと並行して水源の確保を整備拡大した。グリーンハウスの完成と同時に、ハウスにメロン、トマト苗の作付けを行い、8月から9月にかけてイチゴ（カリフォルニア産）をプランターに作付けを行った。イチゴ栽培は高床式。	
環境に優しい各種農業技術の研修 ① 7月17日「教育農園開所式」及び農業セミナー開催 バトゥ市2名、農業高校8名、外国人技能実習OB2名、地元高校生50名、バトゥ市周辺方と現地農家10名、フルサト農場スタッフ3名計75名 ② 農業セミナー開催。 開催日：11月9日（於：バトゥ市ホテル） 講師：バトゥ市農業局（アジ氏）	① 2019年7月17日フルサト教育農場・グリーンハウス完成に伴い、バトゥ市、農業高校、外国人技能実習生OB、地元高校生、バトゥ市周辺方と現地農家、フルサト農場スタッフの参加で開所式を実施した。この開所式の目的は、広く、自治体、地域の方々に、この事業の目的・必要性を周知し理解・支援を得ることにあり、大変有意義な開所式となった。併せて、参加者が興味を示していると思われる農場関係について、農場の広さ、オーガニック栽培にこだわ	① 参加者全員がこの事業の必要性を感じ、支援・協力の確約を得た。また、農場へ行く道路の整備もバトゥ市から道路の拡張の約束を得て、この開所式は成功を収めた。 ② 多くの参加者によるセミナーは功を奏した。ただ、この事業の趣旨目的が理解されたかは疑問。

有機農場グアバ(ハルディ氏) 篤農家(青山氏) 参加者：バトゥ市職員 3 名、農業高校関係者 7 名、農業高校生 50 人、農業大学生 10 名、バトゥ市周辺の農家 10 名、帰国した実習生 10 名 計 90 名	った温室の苗の植え付け方法、灌漑設備、田原市との農業のかかわり等を説明した。 参加者全員がこの事業を理解。開所式は成功裏に終了した。 ② 環境にやさしい有機農法について講演。 バトゥ市農業政策(担当官)と有機農業成功事例の講演。その後、篤農家青山氏による農業経営事例を講演。 ・有機栽培の方法説明。 ・農家、学生に有機農法の高揚。 ・農業起業の意見交換。 ・質疑応答による情報交換。	
日本人農業技術者の現地訪問による指導 ① 篤農家による現地指導 実施日：2019/11/7～11/12 現地指導 現地出席者：フルサトスタッフ 7 名、ファーム従事者 3 名 ② 今後の運営協議：2019. 11. 9 フルサト：フルサトスタッフ 6 名、農場長 1 名 ウイズ：篤農家(青山)、榊原(ウイズ職員) 財 団：川崎 計 10 名	予定をしていた田原市篤農家(青山)による農業指導は、篤農家(青山)の体調不良により実現できなかった。しかし、11 月 6 日～12 日までの期間、バトゥ市へ赴く予定があり、その時点で指導を受ける。 ① 第 1 回の現地指導を行う予定が、青山氏の体調不良により実現できなかった。 第 1 回目の現地指導は、11 月 7 日～12 日間、篤農家(青山氏)による指導を実施。イチゴ・メロン・トマトの作付け指導。また、堆肥の作り方、土壌改良の方法を指導。ファームのスタ	篤農家の指導は、篤農家の日程に合わせ対応を考慮する必要があり、今後は日程調整が必要である。 ① 第 1 回目は 11 月に実施。計画では年 2 回になっており年度末の 3 月に現地訪問する予定であったが、新型コロナウイルスに発生により第 2 回目の現地訪問は断念せざるを得なかった。 ② 今後の運営協議は通訳を交え活発な意見交換が出来、2020 年度に繋がる事を確認した。

	ップに刺激を与える。 ② また、ミーティングではフルサトの状況を報告。その後、運営に関わることを川崎氏より指導。 ※参考：別紙 4 報告書	
日本人農業技術者のテレビ電話による助言	田原市ウイズとのスカイプ更新は、不慣れなこともあり充実したテレビ電話での交信がはかどらなかった。 後期に入ってから、スカイプからラインでの交信が主になり、農場の状況を頻繁に情報提供した。その内容により篤農家（青山氏）より適切なアドバイスをを行った。	今後は、何を聞きたいか、何を指導したいかをはっきりさせてから、更新する必要がある。 出来れば、フルサトインドネシア側で何を聞きたいか、どんな指導を受けたいか事前に連絡調整することが必要。 そこで、11 月にウイズスタッフが訪問の際、フルサトファーム関係者とミーティングを行い運営方法の調整を図った。 また、スカイプでのテレビ電話は、インドネシア側の通訳はあまり日本語が堪能ではない。今後の課題。
現地スタッフによるプログラム作成	情報不足、時間的な問題から計画通りのプログラム作成は出来なかったが、手探りの状況の中、プログラム作成に必要な情報を得る為、バトゥ市が運営している農場（バリタス）及びバトゥ市周辺の農業関係者等から、農業に関わる課題を調査、検証し議論を進めてきた。併せて、	「週刊活動レポート」で確認する限り、特にプログラム作成は行われていない。 今後は、苗付の時期、水のやり方、土壌の整備、堆肥の作り方等、教育農場としての役割から、精度の高いプログラム作成が急務と考える。 2020 年度に田原市において、「栽培編」メロン・

	栽培状況は常に記録をし、プログラム作成に必要な準備を進めてきた。 そこで、専門的な部分については、農場スタッフでは未熟な為、教育農場としてのプログラム作成には田原市篤農家（青山氏）の意見を聞くことが必要であると実感し、情報の共有を頻繁に行い、プログラム作成をすることとした。 後期も継続中。	イチゴ・トマトの映像編集する。 これを踏まえフルサトファームでのプログラムの編集を期待する。
メロン・イチゴ・ミニトマト栽培研修	特に栽培に関する研修は受けず、農業スタッフの経験で苗の作付けをしたが、経験不足な面があり、作物の出来栄は上手くいかなかった。 今後は、田原市の篤農家（青山氏）の指導を受けながら完成度の高い栽培方法を学ぶ必要があることを痛感した。 後期に入り、篤農家（青山氏）が11月に現地訪問し農場にて指導。メロン・トマト・イチゴの出来栄は非常に悪く、その原因等をきめ細かく指導。また、土壌改良、堆肥の作り方もきめ細かく指導。	「週刊活動レポート」で確認する限り、作物はそれなりに出来ている様に思うが、農場担当者によれば、出来栄は芳しくないと聞いている。11月に現地指導する予定があり、その時点で確認、併せて、農場・農業運営指導をする。 11月現地訪問の際、作物の出来栄を見る限り農場スタッフが農業に対する知識が不足していることが判明。11月9日のミーティングの際、農場長も農業の知識不足を認め研鑽を積むことを約束した。
現地農業高校生を対象としたインターン事業 実施時期：2020年2月～3月 16回 バトゥ市農業高校教育実習年16回実施。	事業がスタートしたばかりで時間的な余裕がないことから、インターン事業は実施できなかったが、農業高校とのネットワークづくりは進んでいる。今後は、田原市の受け入れ農家との	スカイプ等でフルサトインドネシアの状況を確認してきたが、時間的な余裕がないことから、実施されなかった。 後期に入り、農業高校との調整により教育実習

	調整を図りながら、インターンシップ事業のカリキュラム作りをしていく。 後期に入り、農業高校との調整が整い農業の技術や経営に関する研修教育を実施した。 ①フルサト農場の趣旨、目的を説明。 ②環境に優しい(有機)農業に対してのスキルアップ。 ③将来、農業を担うリーダ教育。	の場として受け入れることが決定した。 農場での教育実習状況はラインで報告を受ける。 次年度は、どのような教育プログラムを策定するか検討。
その他の事業	観光農業も併せて行いたいことから、バトゥ市にも打診し、道路の拡張、観光農園としての機能の充実を図るべく、バトゥ市と協議を重ね、バトゥ市の協力を確認した。 後期も継続中。	この件については特に確認はしていないが、フルサトインドネシアとの情報交換の中で、承知している。 ただ、事前調査(2019年1月)に訪問した際に農場までの道路整備は実施したい旨、報告を受けていましたが、今年度の現地訪問した際には一部道路の拡張が見られた。

田原市（ウイズ）

活動計画	実施状況	活動実施成果と確認方法
日常生活サポート事業 開催日時：2019年8月25日（日） 開催場所：愛知県立副高校 参加者：技能実習生 25 名 福江高校生徒 10 名 福江高校教諭 2 名 ボランティア 4 名	技能実習生に対して、福江高校観光ビジネスコース学生と連携して、市役所、郵便局、金融機関、スーパーマーケット、バス乗車などといった場面で、日常生活に必要な知識を日本語でレクチャーし、地域とのコミュニケーションのポイントなど伝えていくことを目的に実施。 2019年8月25日（日）技能実習生参加者 25 名。愛知県立福江高校の協力を得て、七輪でバーベキューをしながら日本語の勉強と福江高校の生徒さん（10 名）と交流を深め、防災教室、警察署による交通ルールを学び、福江高校の伊藤先生による田原市の良さのレクチャーを受ける。最後にアンケートを記入し解散した。 ※詳細：別紙 1 報告書	心配していた参加者は思ったより多くあり、実習生にとっては大変有意義な 1 日となった。 アンケート結果は今後もぜひ参加したいが 100% あり今後も期待される。この事業の目的は、実習生の日常生活サポート事業であり、福江高校の生徒とのコミュニケーション図ることが出来、この事業は充実した 1 日となった。
栽培事例視察研修 開催日時：2019年10月27日（日） 視察場所：デイリーパラダイス（酪農農場） 田原市博物館・蔵王山展望他 参加者：技能実習生 38 名 受入事業所 2 名 福江高校生徒 4 名	この事業は、技能実習生が受入れ先の農家以外の農業の状況を経験してもらうことにあり、今回は「酪農家：デイリーパラダイス」の 1 事業所（社主：伊藤 立）を視察した。 実習生のほとんどが初めての経験であり興味津々牛舎の中を見入っていた。伊藤社主の話もあり充実した視察となった。 また、田原市内の田原市博物館、蔵王山、たはら	この事業は、バスツアー形式の研修ということもあり、募集と同時に定員オーバーの参加申し込みがあった。 少しずつこの事業が受入事業所に浸透してきた。アンケートの結果、今後もぜひ参加したいが 100% で、中には帰国してから農業をやってみたいという実習生が 3 人～4 人程いた。

	国際交流協会、田原市民祭り会場、サンテパーク、バロック」を巡回した。これらの体験は今後の実習生活にとって貴重な経験であり、視野が広がりこれからの実習生活に役立った。 この事業実施に当たっては、企画および当日の運営の補助を福江高校観光ビジネスコースに依頼し、多国籍の実習生との触れ合いによる国際交流を通じて、充実した学校生活を学ぶことを目的とした。 ※詳細：別紙2 報告書	
①農業起業セミナー ②日常生活サポート交流会 同日開催 開催日時：令和2年2月23日（日） 開催場所：伊良湖ホテル&リゾート 参加者：技能実習生25名 受入事業所3名 講師：(有)マーコ会長 青山房生氏 渥美農業高校教諭 中丸惇平氏 通訳：(株)プランギ コンサルタンツ イントネシア 社長 佐原利之氏	①田原市の篤農家((株)マーコ会長:青山房生氏)が農業を始めようとした思いと、現在に至るまでの経緯をインターネットを介して説明。また、農業を始めようとする皆さんに、「田原市で農業チャンスをつかみ、母国でそのチャンスを生かしてもらいたい」と助言。 ②伊良湖ホテル&リゾートにて昼食。その昼食会にて、それぞれのテーブルに渥美農業高等学校の生徒・教諭、ウイズのメンバーが席に着き、実習生と和やかな雰囲気の中で交流した。また、アンケートも渥美農高生徒がそれぞれのテーブルに移動し実習生と交流。その助言を受け同席の実習生と会話しながらアンケートに答えた。 ※詳細：別紙3 報告書	アンケートで「農業をやってみたいと思いますか」の問いに対し80%の実習生から「農業をやってみたい」との回答があった。このアンケートからも今回の事業は成功したといえる。

映像資料作成（実習編） （技能実習生を基本として田原市の紹介ビデオ） 開催日時：令和２年２月２３日（日） 開催場所：伊良湖ホテル＆リゾート 参加者：技能実習生 25 名 受入事業所 3 名 講師：渥美農業高校教諭 中丸惇平氏 通訳：(株)フランク・コンサルタンツインドネシア 社長 佐原利之氏	渥美農業高校に技能実習生を中心とした「実習生の実習状況を中心に田原市紹介編」を依頼している。編集は、渥美農高の中丸先生を中心に映像収集が進んでおり、現在はその編集に追われている。なお、栽培編は、2020 年度に編集をする。後期に入って、兼ねてより依頼してあったビデオ編集が完成。それを機に試写会を開催。中丸教諭は通訳（インドネシア語）を交え説明し、技能実習生は興味深く聞き入った。 また、「渥美農業高校」の PR 編も併せて上映した。 訳 7 分間のビデオ試写会ではあったが、中身の濃い充実した試写会であった。	渥美農高に赴き、現状の確認をしている。 一部編集した映像を確認している。なかなかいい出来栄えである。 その後、技能実習生を絡めた田原市の紹介ビデオ完成。見ごたえのある出来栄え。ユーチューブに投稿も検討の価値あり。 渥美農業高校の好意的な協力体制を見て、渥美農業高校から 1 名インドネシアバトゥ市の農業高校へ訪問することも要検討。
映像資料作成（栽培編）	栽培編は、2020 年度事業。 事業目標「市役所・高等学校を巻き込んだバックアップ体制」であることから、田原市の愛知県立渥美農業高校へ栽培編の協力を求め、快諾。この栽培編はかなりの日数がかかることから、既に渥美農業高校へビデオ映像の作成を依頼。中丸先生を中心に生徒たちによる映像の収集が始まっている。 後期も継続中。	中丸先生によると、生徒たちは非常に乗り気で楽しんで映像作製に取り組んでいるとのこと。

日本人農業技術者の現地訪問による助言	6月に篤農家（青山房生）がバトゥ市へ赴き現地指導することになっていたが、本人の体調不良により実現できなかったが、11月6日～12日迄バトゥ市へ赴き農業指導を実施。 年2回の計画であったが、新型コロナウイルスの発生で3月予定していた現地指導は断念した。	11月のバトゥ市への現地訪問行程は充実した内容の計画になっている。
--------------------	--	-----------------------------------

* 行数は活動数に合わせ適宜修正してください。

* 研修を実施した場合は、日時、場所、指導員、参加者人数（新規、継続の別）、研修内容（研修の回数含む）を実施状況に明記してください。

別紙2 自己評価(該当する項目に☒を入れてください)

スケジュール管理	☐ 計画通りに実施できた	☒ ほぼ計画おとりにできた	☐ 変更が発生した
変更が発生した原因と改善策 （ふるさと） 断食の期間が5月から6月にかけてあり、スタート時期は遅れたものの、ほぼ計画通りに実施できた。 しかし、農場運営には未経験な部分もあり、篤農家（青山氏）の指導を受け、教育農場としてのプログラムを作成する必要がある。 （田原市） 特に変更不值する問題は発生しなかった。			
事業成果	☐ 期待する通りの成果が得られた	☒ ほぼ期待する通りの成果が得られた	☐ 成果が得られなかった
成果がえられなかった原因と今後の対策 （ふるさと） 農場運営は、かねてより準備をしてきたが、経験不足によりあまり良い成果が得られなかった。 今後は、田原市の篤農家（青山氏）の意見を聞き、土壌の整備等基本的な面を勉強していく。			

(田原市) 1つ問題といえば、6月に予定していた、篤農家による現地（インドネシア）での農業指導は篤農家の体調不良で先延ばしになったが、11月6日～12日に現地へ赴き農業指導を実施した。		
当初期待していなかった成果や社会的影響等	☒ あった	☐ なかった
(ふるさと) この事業を運営するにあたって、自治体の支援・協力が必要であることから、再三、バトゥ市、農業高校を訪れた結果、支援・協力を確約していただいたことは、今後の運営に大きな力となった。 特に、7月17日に開催した「教育農場」開所式には行政、農業高校、地元の農業関係者に広く呼びかけたこともあり、多くの方々が参加され、教育農場の必要性の理解が得られたと自負している。また、農業高校の理解があり、生徒の教育農場として利用していただいた。 (田原市) 予定していなかったが、新聞報道が中日新聞（地方版）に、福江高校生徒との交流会が大きく報道された。また、栽培事例視察研修（バスツアー）の事業もこの地方の東愛知新聞に大きく掲載された。また、農業起業セミナー・映像試写会・交流会についても新聞報道され、思ったより地域に反響があったと自負している。 技能実習生受入農家の評判もまずまずであった。		
評価点： (ふるさと) 70点 （総合的にみた自己評価。100点満点） (田原市) 90点 （総合的にみた自己評価。100点満点）		

活動地域での反響（受益者へのアンケートやコメント等含む）

(ふるさと) マスコミの報道はされなかったが、バトゥ市、農業高校、地域農家への協力要請等周知を図ることで奏功し、この事業の必要性が認知された。 (田原市) 前段でも触れましたが、かなり良い影響があった。（事業実施の都度、大きく新聞報道された）
